



二人をつなぐ流れ星



案山子 (Read Me. 47G)

「さすがに、そろそろマズイよな」

彼——紺野マモルは焦っていた。大学4年生の夏。彼は未だに進路が決まっていなかった。就職活動が本格化するのはまだ先だが、それでも現時点で明確に決まっていないのは周りに後れをとっていると言えるだろう。そうは言っても、まだ進路が決まっていない人に対して、あれこれと非難する権利など誰にも無いのだが。

彼にとって一番の問題は、“やりたいことがない”ことだった。マモルには人に自慢できるほどの趣味もなければ能力もない。世の中には生まれながらにして才を与えられ、それを仕事にしている人もいる。しかも自分の好きなことであることが多い。それはまさに天職と言えるだろう。

「はあ、俺にもそんな才能の一つでもあったらなあ。もういっそ、誰かに自分の行き方を決めてほしいくらいだよ。はあ〜」

マモルのため息が部屋に溶け込んでいったところで、携帯電話が鳴った。

「久しぶりねマモル。元気にしてた？」

マモルが「もしもし？」と言う前に向こうから一方的に話しかけられた。そう、彼女は昔からこういう子だった。

紫藤エリカ。彼女はマモルの幼馴染である。高校を卒業してから、演技を学ぶために単身でアメリカに留学していた。たまに電話で会話することはあったが、ここ最近では全く音沙汰がなかったのだった。

「ああ、なんとか元気にやってるよ。てかもう日本に帰って——」

「そう、じゃー今日の夜は空いてる？ 少し私に付き合ってよ」

この二人の会話からも分かる通り、マモルはいつもエリカに振り回されてばかりだった。

「あ、空いてるけど……」

「それなら、今晚いつもの丘の上で会おうよ。いろいろと積もる話もあるし」

そうして、一方的に電話を切られてしまう。エリカは昔からこんな性格だった。

窓の外を見ると、深いオレンジ色に染まる太陽が山の向こう側へ沈もうとしていた。雲一つ無い夏の空。マモルはそんな風景を見つめながら、徐々に会う幼馴染に対してどんな話をしようか、ずっと考えていたのだった。

そうして夜になり、マモルは丘の上にやってきた。いつもは人気のない場所のはずが、今日はやけに人がいた。そんな中で、マモルは扇子を手にしたエリカの姿を見つけた。

「あ——」

マモルはすぐに「ヤバイ、と思った。彼女が自分のほうへ振り向くその瞬間の中で。

でも彼には、いったい何が「ヤバイ」のか。それは分かっていなかった。

「マモル、久しぶりね。ふふ、相変わらずおかしな顔している。ぜんぜん変わってない」

「おかしな顔って……ったく、失礼なところはお前もぜんぜん変わってないよ」

エリカは、とても美しくなっていた。それもそのはずで、彼女は女優を目指すためにアメリカで演技を学んだのだ。マモルも詳しい話は知らないが、女優は多くの観客に観られることで綺麗になっていくと聞いたことがある。

二人は近くにあったベンチに座って、いろんなことを話した。でも、ほとんどエリカが一方的に話していた。アメリカでの生活や演技の修行のこと。そして、これからのこと。

それらの話は、今のマモルにとってはとても素直に受け止められるようなものではなかった。

彼女の話は眩しすぎて、その光を受け止めるだけの器がマモルには無かったのだ。

マモルはエリカの話の聞けば聞くほど、自分のことが情けなくなっていた。

「ね、今日呼び出したのはさ、お話をするためだけじゃないんだよ？」

エリカはそう言って、空に指を差した。何故か周りにいた人たちもざわめき出す。なんだろうと思い、マモルは空を見上げた。

——そこには、今まで見たこともないような景色が広がっていた。

たくさんの星が、光の軌跡を残しながら流れ落ちている。

「こ、これは……」

「ふふ。今日はね、ペルセウス座流星群が見られる日なんだよ」

そう言いながら、エリカはマモルの傍によってきた。彼女の肩がマモルの肩に触れる。

「マモルがね、いろいろ悩んでることなんて、たとえ電話越しでも声きけばわかるんだから。会って、表情を見えばもう一目超然。水臭いじゃない。たとえ離れてたって、私には相談してよ」

マモルは、何が「ヤバイ」のか、ようやく分かったようだった。

その証拠に、彼の瞳からは一筋の涙が流れている。

自分にとって近い存在だったはずの人が、遠く離れて、自分には無いものを掴んでいて……。

そう思っていたのに、もう届かないかもって思ってたのに。
こんなにも——自分の近くにいたんだ。
マモルはようやく、そのことに気が付いたのだった。
エリカはそんなマモルの表情を優しく見つめながら、自分の顔をマモルに近づける。
だがその先は、エリカが持っていた扇子によって隠されてしまい、二人がいったい何をしているのか、周りに
いた人間には全く見えないのだった。

—————Maid To Order to run in night sky. closed.